論　壇

「地域に根差し、地域とともに」を合言葉に
～常葉大学・常葉大学短期大学部の地域貢献活動

今後、地域貢献活動と教育・研究との関係強化へ

常葉大学・常葉大学短期大学部は静岡県内に4つのキャンパスを持ち、学生数おおよそ8千人の県内最大規模の私立の総合大学である。在学生の9割ほどが県内出身者で、文字通り地域に根差した大学であり、地域貢献は、「知徳兼備」、「未来志向」とともに、本学の3つの教育理念の1つとなっている。

本学の創設以来、地域貢献を活発に行ってきたが、2018年4月に静岡草薙キャンパス開設を機に、これまで以上に地域に開かれた大学を目指し、「地域に根差し、地域とともに」を合言葉として、地域貢献センターを開設し、大学全体が地域連携の拠点となるように組織強化を行った。現在、地域貢献センターでは、従来の公開講座をはじめとし、地域の抱える諸課題に対し教員が専門的な立場から取り組む「地域交流・連携推進事業」及び学生の自主的な地域貢献活動を大学が支援する「とこは未来塾―TU can Project―」など、数多くの事業を展開している。

「地域交流・連携推進事業」は地方自治体及び民間団体等と共同又は連携して、地域活性化等を図ることを目的とした事業で、本学の研究成果等を地域に還元するとともに事業の効果が本学の教育・研究に反映されるものを支援対象としている。毎年11月から募集を開始し、地域連携推進委員が選考を行い、5件から8件を採択している。また、「とこは未来塾―TU can Project―」では、学生ならではのユニークな「視点と発想」を持ち、「熱意と創意」に満ちた自主的・自発的な取り組みに対し、大学から教員アドバイザーによる助言や活動資金の援助などの支援を行っている。募集プランはスタートアップとしての「ライトプラン」と発展性のあるプロジェクトに対応する「ベーシックプラン」があり、毎年2月から5月に募集を行い、地域連携推進委員会で選考を行い、ライトプランとベーシックプランあわせて15件から20件を採択している。プロジェクト終了後の3月には、参加者のプレゼンテーション力の養成と翌年の取り組みへのヒントとなることを目的に、事業報告会を開催している。

2020年度は新型コロナウイルス禍中となり、対面での地域貢献活動は大きく制限されたが、「とこはWeb通信　新型コロナウイルスを考える」というリレーエッセイを本学公式ホームページ上で公開し、様々な観点から新型コロナウイルスを乗り越えるための知恵や情報を地域に向けて発信した。教員の協力を求め、それぞれの専門的な立場から、新型コロナウイルスに関するエッセイを募り、全部で50のエッセイを掲載することができた。

このようなホームページを通した地域貢献活動を継続すべく、2022年度からは「常葉大学×SDGs―地域とともに持続可能な社会の実現へ―」を掲載している。この企画では、持続可能な世界の実現に向けて2030年までに達成すべきゴールを定めた国際目標である「SDGs」と、本学教職員及び学生が日頃から取り組んでいる活動を紐づけて、毎週木曜日に2例ずつ紹介している。2023年11月末までで、67号まで掲載されている。

地域貢献センターは地域貢献活動の拠点としての役目だけではなく、災害の際の地域への支援活動の拠点ともなっている。2022年9月23日夜から24日未明にかけて静岡県に接近してきた台風15号がもたらした大雨の影響によって、静岡草薙キャンパス及び近隣地域も道路の冠水や住宅の浸水といった被害を受けた。こうした事態を受けて、本学では学生・教職員に協力を募り、学生による託児、給水支援及び支援物資の配布など、大学や周辺地域の復旧・支援活動を実施した。

以上のように、本学においては積極的に地域貢献活動を行っているが、それらの活動は教員個々人の熱意や自主性に頼っており、組織として能動的に実施する体制に欠けている点が課題となっている。また、今後ますます重要となるPBL（問題解決）型の授業を進めていくには、地域社会との連携は欠かせない。そういう点で、地域貢献活動と教育・研究との関係強化も課題である。

常葉大学・常葉大学短期大学部　学長　江藤　秀一